

CHSSL EXPOSITION SERIES NUMBER 04

# ヒューム『宗教の自然史』の思想圏

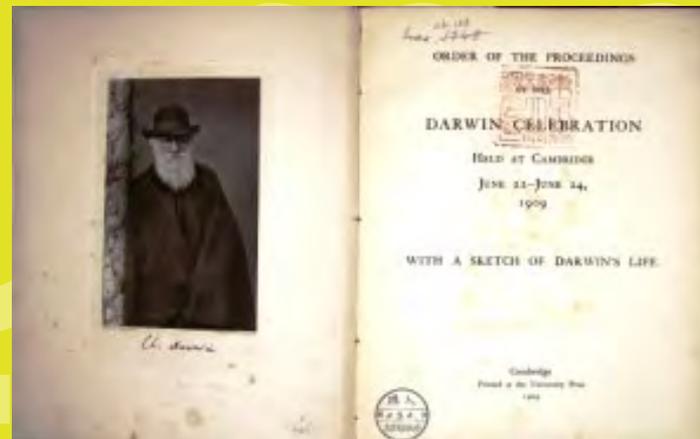
啓蒙の進化論：宗教の起源は一神教か、多神教か？

Hume

Voltaire Fontenelle

2009年はCh・ダーウィン（1809-1882）の『種の起源』（1859）の出版150周年にあたりと同時に、彼自身の生誕200周年が重なる節目の年だった。これに合わせてアメリカ自然史博物館が企画した「ダーウィン展」が日本を含めて世界を巡回し、日本でも2つの新訳が出るなど、ここ数年進化論に対する関心が世界的に再び盛り上がりを見せている。

日本でも多くの邦訳がある進化生物学者R・ドーキンスやS・グールドらの仕事に代表されるように、現代進化学の隆盛については改めて強調するまでもないだろう。だがその同じアメリカで、「進化論」は単なる学問の対象に留まらず、それを批判するキリスト教福音派による公立学校での創造説の復権運動や、彼らが保守系政治家の有力な支持基盤となっていることなど、21世紀の現在も政治的な議論の的であり続けている。創造論者が用いる神の存在証明、いわゆる“インテリジェント・デザイン論”などに接し、3世紀以上も昔の理論がいまなお生き続けていることに少なからぬ驚きを覚える人もいるだろう。

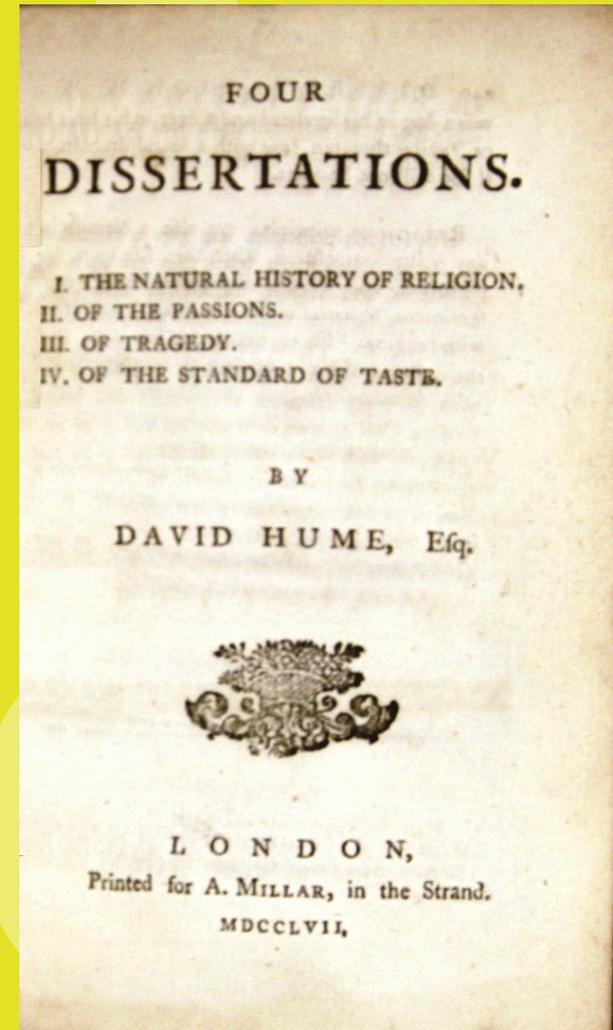


1909年にダーウィン生誕百周年を祝ってケンブリッジ大学で開かれた祝典の式次第 *Order of the proceedings at the Darwin celebration held at Cambridge, June 22-June 24, 1909*

【Soda Ab 158】

だが進化説と創造説の対立は、ダーウィン以降にはじめてあらわれた未知の構図ではなかった。自然淘汰説そのものは確かに19世紀後半にその成立を見るが、18世紀においても進歩の観念の登場に伴い、それまで公式の人類史であったキリスト教普遍史（教会史）の土台が揺らぎだし、進化の問題が宗教や神の観念の起源はなにかという宗教史の問題として広く語られはじめたからである。

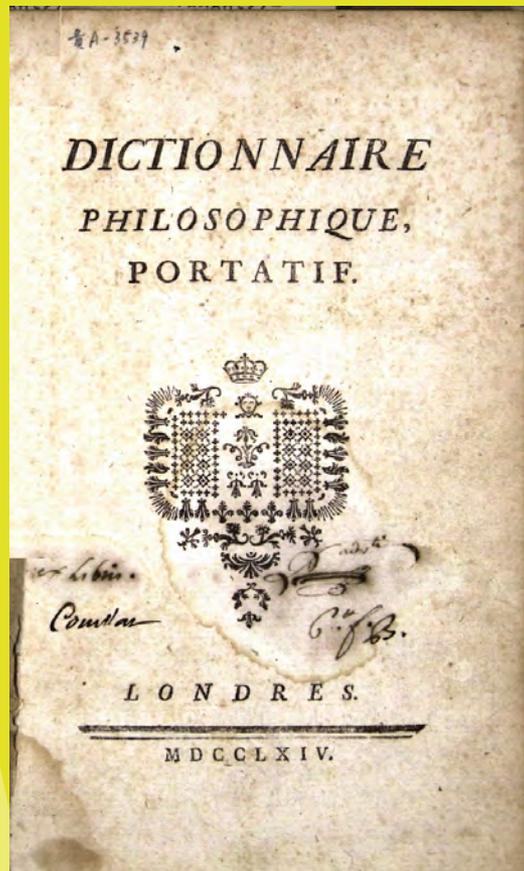
宗教の起源が一神教なのか、多神教なのかという問いは宗教学的関心に留まらない政治的な問題も含んでいる。もし多神教が宗教の起源なら一神教=キリスト教は、いつ・どこから生まれたのか。もしキリスト教が歴史を持ち、しかも異教をその母として生まれてきたとするなら、王権神授説をはじめ、あらゆる社会制度の権威の根拠はいったいどこにあるのか。こうした問いに対する啓蒙思想の回答のいわば決定版といえるD・ヒューム（1711-1776）の『宗教の自然史』（1757）を手掛かりに、啓蒙思想周辺の宗教起源論の系譜を歴史的に振り返ってみたい。



ヒューム『宗教の自然史』 Hume, David, *Four dissertations : I. The natural history of religion. II. Of the passions. III. Of tragedy. IV. Of the standard of taste*, London, 1757【貴A B192】

『宗教の自然史』を含む四論考は、出版の前年の校正の段階で国教会の重鎮ウォーバートン卿の手に渡り、出版者に圧力がかけられた。ヒュームは、理神論者A・スミスらの忠告を受け入れ、慎重を期して『自然史』を書き改めたが、出版後もウォーバートン一派から激しい追及を受けることとなった。

ヴォルテール『哲学辞典』[Voltaire],  
*Dictionnaire philosophiques, portatif*,  
Londre [i.e. Genève], 1764【貴A 3539】  
ヴォルテールは『百科全書』にも収録され  
た「宗教」項目だけでなく、「偶像崇拜」、  
「神」、後に増補された「多神教」といった  
項目、さらには『哲学辞典』の翌年に出版  
された『歴史哲学』(1765)の全編にわたっ  
て、あらゆる民族が例外なく複数神の背後  
に唯一神を認識していたという同様の論  
証を繰り返し行った。



宗教に関するヒュームの著作に対して18世紀の同時代人  
はどのような反応を示したのだろうか。当時の人たちが何  
を問題としたのかまずは探ってみよう。2001年にヒューム  
の著作へのさまざまな応答を集めた『ヒュームへの初期応  
答集』が出版され、比較的容易にその内容の一端を知るこ  
とが出来るようになった。

この『初期応答集』はヒュームの政治論、道徳論、認識論、  
『イングランド史』等々に対する応答を収録した全10巻から  
成る浩瀚なシリーズであり、宗教論については『ヒューム  
宗教論への初期応答集』<sup>1)</sup>と題された第5巻と第6巻に収めら  
れている。そこに含まれるテーマの内訳をみると、『奇蹟  
論』及び『特殊的摂理について』に関するものが12論文、『宗  
教の自然史』が16論文、『自然宗教に関する対話』が9論文、  
『自殺論』及び『魂の不滅について』が20論文という割合で、  
長短あわせて合計57もの論考が収集されており、彼の宗教  
論に対する当時の反響の大きさを窺い知ることが出来る。

ところで『宗教の自然史』を対象とした16論文の著者の多  
くは、現代ではほとんど忘れられた作家であるが、一人だ  
けひとときわ輝きを放っている人物が含まれている。18世紀  
啓蒙思想の代表格ヴォルテール (1694-1778) である。

1) J. Fieser (ed.), (2005)

ヴォルテールは、『哲学辞典』（1764）の「宗教」項目で、「ある学者」の説に対して敬意を表しつつも次のように批判した。

「現代の最も深遠な形而上学者の一人であり、〔ウォーバートン卿より〕はるかに哲学的なまた別の学者が、人類の最初の宗教は多神教であり、人間はその理性が唯一の最高存在を認めるほど開明するよりも前に、まずは複数神を信じ始めたのだと証明する強力な論拠を示した。だが私はむしろこう信じたい、人間はまず唯一神を認め、ついで人間の弱さから複数神を採用したのだ、と」。

### *Seconde question.*

Un autre savant beaucoup plus philosophe, qui est un des plus profonds métaphysiciens de nos jours, donne de fortes raisons pour prouver que le polythéisme a été la première religion des hommes, & qu'on a commencé à croire plusieurs Dieux, avant que la raison fût assez

しかし実をいえば、この項目がヒュームを念頭にして著されたものであるのか、これまで必ずしもヴォルテール研究者のあいだでコンセンサスが得られてきたわけではない。というのも、ヴォルテール自身が「ある学者」を明示していないからである。

たとえば、1968年から刊行されている『ヴォルテール著作全集』（オックスフォード財団）の編者は、彼が敬意を表しながら批判したという点から、この批判相手を『神話の起源』（1724）のフォントネルだとし、『哲学辞典』（法政大学出版局）の訳者高橋安光氏は、『一神教の上昇と進歩について』（1754）のボーリングブルックであると推定している。一方、この項目を『初期応答集』に収録した当の編者フィザーはその解説で、ヴォルテールと同時代の哲学辞典編纂者F=X・スヴェディアウアー（F-X. Swediauer:1748-1824）が、自著でヴォルテールの批判相手をヒュームだと最初に特定したことをその根拠に挙げ、後にも先にも彼以外にこの点に気づいた人物はおそらくいないと述べている。この人物以外に証拠がないというのは心許ないように見えるが、しかしこの批判相手がほぼヒュームであることは、宗教史研究のR・ペタッツオーニや啓蒙思想研究のP・ゲイらによってもすでに指摘されており<sup>2)</sup>、フィザーがこの項目を『ヒューム宗教論への初期応答集』に加えたことは決して誤りではない。

なるほど「ある学者」の正体は新資料の発見でもない限り、今後不明のままだろう。ただ、批判相手がいずれであったにせよ、ヴォルテールにとって受け入れがたい考えが、彼らに共通した宗教史観、つまり宗教の多神教起源説だった点に注目してみたい。

2) R. Pettazzoni (1950), P. Gay (1966)

لان عبادة الاصنام المكروهة هي علة كل شر وابتداؤه وغايته

「実体のない偶像を礼拝することは、諸悪の始まりと源、そして結末である」(「知恵の書」14・27)。

宗教の起源は一神教か、多神教か？ この問いがキリスト教の伝統の中で大きな焦点となったのは、大航海時代が幕を開けた16世紀までさかのぼる。新大陸の偶像崇拝の原因を聖書にすり合わせる形で説明する必要に迫られた神学者らは、偶像崇拝を禁じた十戒や「知恵の書」を根拠に、それを創造神の崇拝からの墮落とみなし、現地住民の改宗・撲滅を正当化してゆく。

しかも同時代に宗教改革が勃発して以降は、ローマ教会を異教だとするプロテスタントの論争が活発となり、偶像崇拝批判にさらに拍車がかかった。それまで偶像崇拝とは古代ギリシア・エジプトという時間的に、あるいは新大陸やアフリカのような空間的に遠く離れた信仰を指していたにもかかわらず、ここにきて「諸悪の根源」が実はキリスト教という身内に巣くっていたことになったからである。

聖書本来の教えへの回帰を説いた改革者たちは、異教徒の偶像崇拝とカトリックの聖人崇拝の類似点を指弾しながら「異教=パピズム」批判に力を入れた。H・グロチウス（1583-1645）、S・ボシャル（1599-1667）、Th・ゲイル（1635-1702）ら新教聖書解釈者らは、カトリックを含む偶像崇拝の原因を原始一神教からの墮落に求め、原始キリスト教の純粹・素朴な崇拝との相違を強調していった。いずれにしても、異教の神話は旧約聖書の剽窃、ないしはその退廢的派生物だとする考えは、プロテスタント、カトリックを問わず、その時代に反対者を見出すのが困難なほど異教の起原を説明する支配的見解であった<sup>3)</sup>。

3) H.Pinard de la Boullaye (1929)



### グロチウス『キリスト教の真理について』

Hugo Grotius, *De veritate religionis Christianae*, Editio tertia, prioribus auctior, & emendatior, Lugduni Bataourum, Ex officinâ Ioannis Maire, 1633【Miura/K:200】

THE  
True Intellectual System

OF THE  
UNIVERSE:

THE FIRST PART;

WHEREIN,

All the REASON and PHILOSOPHY  
Of ATHEISM is Confuted;

AND

Its IMPOSSIBILITY Demonstrated.

By R. CUDWORTH, D. D.

Origenes,

Γυμνάσιον τῆς ψυχῆς Ἡ ἈΝΘΡΩΠΙΝΗ ΣΟΦΙΑ,  
Τέλος δὲ Ἡ ΘΕΙΑ.

L O N D O N,

Printed for Richard Royston, Bookfeller to His most  
Sacred MAJESTY, MDCLXXVIII.

しかし17世紀に入ると、異教を悪魔の導きや聖書の剽窃に帰すデモノロジー解釈に異議が唱えられる。「理神論の父」E・ハーバート（1583-1648）をはじめ、ケンブリッジのプラトン主義者R・カドワース（1617-1688）やJ・トーランド（1670-1722）らイギリスの自然神学や理神論の登場である。彼らにとって唯一神はキリスト教的神を意味せず、既存の啓示宗教に先行する「最も単純、最古で、真である自然な宗教」（J・ボダン『七賢人の対話』1588）である。この自然宗教は世界の創造と共に古い生得観念であり、教会や秘跡をもたない異教徒さえも神の救いに与ることが可能である。いわば全宗教の公分母である普遍宗教の存在を論証しようとしたハーバートは遺稿『異教論』（1663）でインカ帝国における自然宗教の存在を肯定した<sup>4)</sup>。

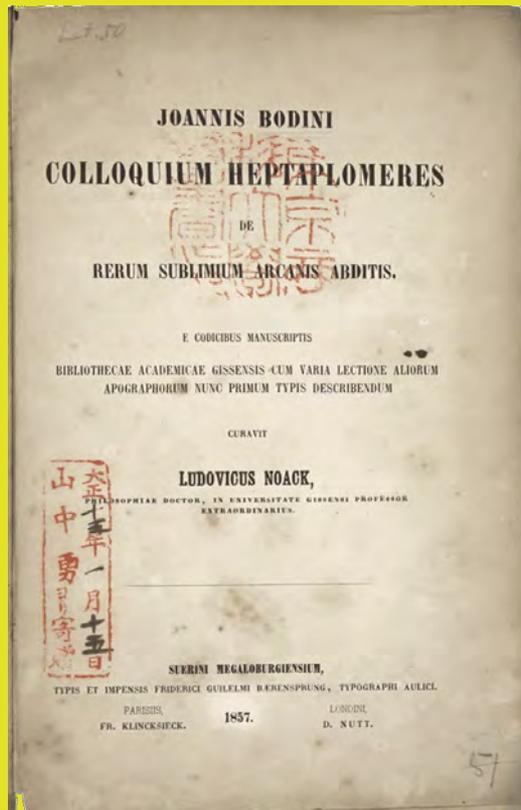
4)B. Willey (1953)

カドワース『宇宙の真の知的体系』Cudworth, R. *The true intellectual system of the universe*, London, 1678.【貴A B127】

本書はフォリオ版900頁にもわたる無神論論駁を目的としたカドワースの主著。彼が登場する思想的土壌となったケンブリッジ大学は16世紀のエラスムスの招聘以来、イギリス・プラトン研究の拠点となり、プラトニズムとキリスト教の一致調和を目指した。先験性を否定する当時の精神上的の2大勢力、ピューリタニズムと哲学的経験論がこの学派の論敵となったのは必然だった。

1685年、ルイ十四世がナントの勅令を破棄し、プロテスタントは再び改宗を強制され、学者の多くは国外に亡命する。17世紀に登場した“異教徒の救い”<sup>5)</sup>をめぐる理神論の論理とそのカルヴィニズム批判は、周知のように18世紀啓蒙思想の宗教論の主流を占め、宗教寛容の理論として多くのフィロゾーフによって啓示宗教批判に利用されてゆく。この思想潮流をイギリスから大陸に導入・普及させた立役者こそ、もちろんヴォルテールその人である。

5) 山田 (1993)



J・ボダン『七賢人の対話』(前ページ参照)の後年の版

*Joannis Bodini Colloquium heptaplomeres de rerum sublimium arcanis abditis ...*, curavit Ludovicus Noack, Typis et impensis Friderici Guilelmi Bærensprung, typographi aulici, 1857. 【Menger Lat. 50】

カラス事件結審の翌年、ヴォルテールは『哲学辞典』（1764）でユマニズムの系譜を継ぎ、異教徒の神々は唯一神の象徴にすぎないと主張した。たとえば古代ギリシアやエジプトには多くの神々がいたが、それでもゼウスやアモン・ラーなど最高神は別格であり、この最高神から墮落した「二級神への崇拜が後に“偶像崇拜”と呼ばれた」（「宗教」項目）のである。どんな人間も「まず唯一神を認め、ついで人間の弱さから複数神を採用した」とすれば、特権的に原始の一神教を信奉していたのはユダヤ民族に限られない。このようにヴォルテールは異教批判というよりむしろ異教のなかに「唯一神」を見いだすことで、キリスト教の正統性を相対化しようとする。

*Dictionnaire philosophiques, ...*,  
op.cit., pp. 310-314から引用

... J'ose croire, au contraire, qu'on a commencé d'abord par reconnaître un seul Dieu, & qu'ensuite la faiblesse humaine en a adopté plusieurs, & voici comme je conçois la chose. ...

... En un mot il paraît prouvé que du temps d'Auguste, tous ceux qui avaient une religion, reconnaissaient un Dieu supérieur, éternel, & plusieurs ordres de Dieux fécondaires, dont le culte fut appelé depuis idolâtrie. ...



... Une [la religion naturelle] & l'autre [la religion révélée] supposent un Dieu, une providence, une vie future, des récompenses, & des punitions ; mais la dernière suppose de plus une mission immédiate de Dieu lui-même, attestée par des miracles ou des prophéties. ...

このように理神論は、歴史の始原には唯一神が存在し、多神教はそこからの派生・墮落であるとする点では、実はキリスト教神学と原始一神教の論理を共有していたのだ。「あらゆる宗教の基礎は唯一神」であり、自然宗教も啓示宗教も「共に一つの神、一つの摂理を想定している」（『百科全書』「宗教」項目）とすれば、この点に関して両者の「真の宗教」観に違いはない。フィロゾーフの目的が「哲学者の楽園」（カール・ベッカー）の再建だったとまでは言えぬとしても、理神論が依拠する象徴説自体は、クザーヌスの流出論体系に遡るカトリック神学にその起源をもち、対プロテスタント論争を経由して聖書の人類単一仮説と原始的啓示を立証するために一つの人類から宗教や言語が広まったとする伝播説の証左とされてきた<sup>7)</sup>。

7) F. E. Manuel (1959)



実際、この伝播説と象徴主義に依拠して異教の起源を一神教からの墮落に求めた当時の神話学者A・バニエ（1675-1741）の『神話学』（1738）は、はたしてヴォルテールの主要な情報源の一つであったし<sup>8)</sup>、逆にその『哲学辞典』「宗教」項目は、ベール、ドルバック、ルソーら不信仰者批判に一生を捧げた当代の大護教論者N-S.ベルジエ（1718-1790）によって、その著『異教神の起源』（1767）に好意的にまるまる引き写され、原始一神教の弁護論として神学者に利用されさえした。

こうした事実が示しているのは、キリスト教神学と理神論が共に確保したかった論点こそ一神教の歴史的普遍性にあり、“唯一神の観念なき民族が地上に存在する”と主張するリベルタンへの反論、つまり両者にとって当面の共通の敵である“無神論”に対抗する必要があったわけである。

ドルバック『聖なる感染—迷信の自然史』 [Holbach, baron d'], *La contagion sacrée, ou Histoire naturelle de la superstition : ouvrage traduit de l'anglois*, Londres [i.e. Amsterdam], 1768【貴A B632】

イギリスの無神論者ジョン・トレンチャードの『迷信の自然史』（1709）なる書の仏訳版という体裁で非合法出版されたドルバック男爵（1723-1789）の著作。「多神教は一神教よりも寛容である」、「恐怖が神を生む」とする本書の主張は、『宗教の自然史』のその後の思想的影響を十分にうかがわせる。

8) J. H. Brumfitt (1969), R. Pomeau (1969)

Fontenelle

*J. P. Todd - Thomas*  
*Chute Sep 22 1896*  
*from S. C.*

A N  
E S S A Y

CONCERNING  
**Humane Understanding.**

In Four BOOKS.

*Quam bellum est velle confiteri potius nescire quod nescias, quam ista effutientem nauseare, atque ipsum sibi displicere! Cic. de Natur. Deor. l. 1.*



LONDON:

Printed by *Eliz. Holt*, for **Thomas Basset**, at the  
*George* in *Fleetstreet*, near *St. Dunstan's*  
Church. MDCXC.

17世紀中にすでに『人間知性論』（1690）のJ・ロック（1632-1704）によって経験論の立場からハーバートの生得観念論が、続いて『続・彗星雑考』（1704）のP・ベール（1647-1706）によってカルヴァン主義の立場からカドワースが唱えた神の観念の「万人の一致」論が、それぞれ否定された。ただ彼らにしても、偶像崇拜者が唯一神を認識できるはずはないと批判を加えたにすぎず、決して一神教の真理性自体を否定したわけではない。「保守的カルヴィニスト」（野沢協）、ベールはもちろん、ロックもまた一神教の真理性と理性による唯一神の把握を否定するはずもなく（『キリスト教の合理性』1695）、ここでも原始一神教の論理は保持される。蒙昧への「寛容」を超えて、本当の意味で真の宗教＝一神教という図式をつき崩すのが、18世紀の宗教進歩論者たちである。

ロック『人間知性論』

[John Locke], *An essay concerning humane understanding, in four books*, Printed by *Eliz. Holt*, for **Thomas Basset** ..., 1690【Franklin 4193】

「宗教そのものが歴史的に進歩を遂げる」という考えは、当然「宗教の起源はなにか」という宗教起源論への回答を含む。実践面でカトリックの宗教的不寛容を指弾してきた理神論も、理論面では複数神の出現を原初の唯一神からの派生・墮落に帰す点で神学と一致しており、すでに完成した一神教がなおも進歩する余地はない。それゆえ宗教史に進歩を認める議論は宗教の起源が必然的に“未完成な”崇拜、つまり偶像崇拜や多神教であることを前提とする。こうした主張を17世紀末の新旧論争の中から古代派批判の文脈で展開したのが、近代派の論客フォントネルの『神話の起源』（1724）である。

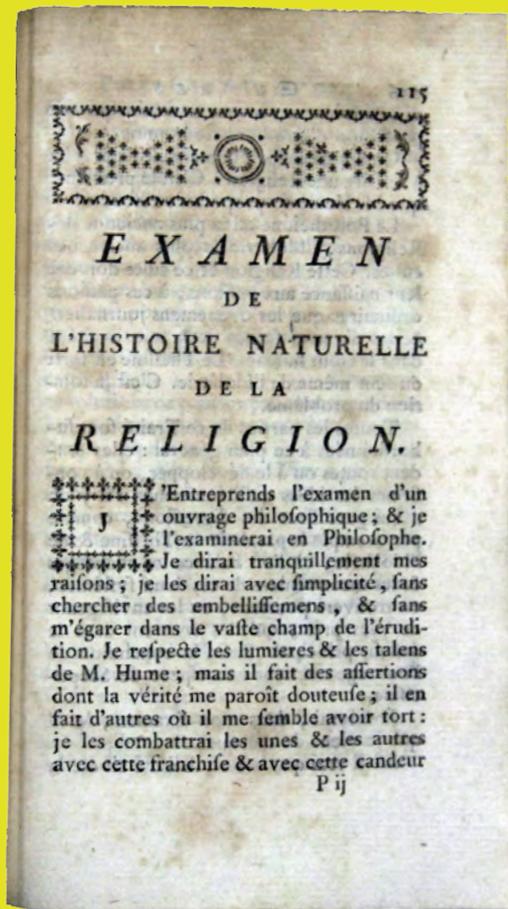
フォントネルは最初の神々は自然の脅威に対する人間の無知が生んだ人格神（神人同型論）だと主張した。人間は本性的に未知のものを既知のものから説明しようとする。たとえば古代人は落雷など未知の自然的所業を、人間の所業ですべて説明したにちがいない。人間が最もよく知っているのは人間自身の行動だからだ。ならば自然現象の原因に無知な古代人は決して高尚な唯一神ではなく、自然の所業ごとに神を人間に似せて、それも複数創ったはずである。古代人も現在のアメリカ先住民同様、全く無知で野蛮の状態にいたのであり、その証拠に「アメリカ住民と〔古代〕ギリシア人の両神話の驚くべき一致」が証明される。我々は古典古代への盲目的な憧憬の念から高尚な宗教の存在を信じているが、異教神話の神々は人間精神の誤謬の産物以外のものではありえない――。



同時代のアメリカ先住民と古代ギリシア人の神話の比較という方法は、奇しくも同じ年に『原初時代の習俗と比較したアメリカ野生人の習俗』のラフィットウ（1670-1740）によっても提唱された。1712年から6年間、北米イロクオイ族との生活を綴ったこの記録は、フランスに留まらず18世紀中にすでにA・スミスからヘルダーまで「野生」に関心のある多くの読者を獲得した。ただ方法の点でフォントネルと同じでも、その動機はまったく異なっていた。このフランスのイエズス会士にとって聖書の伝播説に依拠する限り、ギリシア人とアメリカ先住民が共通の祖先を持つことは比較の絶対条件であり、宗教性なき人間が地上に存在すると主張する無神論者への反論にあったからである。

ラフィットウ『原初時代の習俗と比較したアメリカ野生人の習俗』 Lafitau, P. *Mœurs des sauvages américains, comparées aux mœurs des premiers temps*, 4 tomes, t. 1er, Paris, 1724 【Menger Eth. 214(1)】

イロクオイ族には「ユダヤ人同様、かつての異教徒たちももっていた、全民族に共通な宗教慣行と法的尊守が存在した」(t.1, p.415)。ラフィットウの目的はフォントネルとは確かに異なったが、宗教現象の単なる記述や旅行記の次元を超えて、古代人と野生人の比較検討という一定の解釈枠組みに則った、いわば現代のフィールドワークのはしりであった。また19世紀には『ナッシュ族』(1827)のシャトーブリアンらロマン主義者の想像力もかき立てた。



これに対し、ホップズ流の自然状態論をベースに神話の起源を「最初の人間の無知」に還元し、野生人と古代人の同質性を主張することで古代派に打撃を与えようとしたフォントネルにとって、彼らの崇拜はあくまで無知で野蛮であり、幸福な時代の純真無垢な宗教などでは決してない。黄金時代を歴史の原初に求める代わりに、歴史の終点に求める思考から「進歩の観念」<sup>9)</sup>が登場する。『世界の複数性についての対話』(1686)がすでに禁書指定されていた状況で、ユダヤ・キリスト教の起源も異教の神々の起源と同根である点を読者に暗示するに留まったフォントネルに対し、この限界を超えるのが『宗教の自然史』(1757)のヒュームである。

9) P. Hazard (1935)

『宗教の自然史』仏訳に添付された「宗教の自然史の批判的検討」[Mérian, Jean Bernard], « Examen critique de l'Histoire naturelle de la religion », in *Histoire naturelle de la religion, Œuvres philosophiques de M. D. Hume*, traduites de l'anglois, t.1er, Amsterdam, 1759【貴A B391】イギリスで『自然史』が出版された2年後の1759年、アムステルダムから出された仏訳版には匿名者による長文の批判論文が合本されていた。訳者の友人という体裁を取っているが、訳者J.B.メリアン(1723~1807)自身の筆になると目されるこの論文は、ヒュームの多神教起源説に対して原始一神教の論理を対置させて徹底的に批判を加えている。

ヒュームもまた宗教の起源を人間の「希望と恐怖」に求め、古代人を唯一神の観念なき「一種の迷信的無神論者」と断定する。ここまでは異教の起源の説明としてはこれまでの論者と大差ないが、ヒューム最大のインパクトは宗教の起源に関して異教と預言者の宗教の間に一切の区別も設けようとしなない点にある。

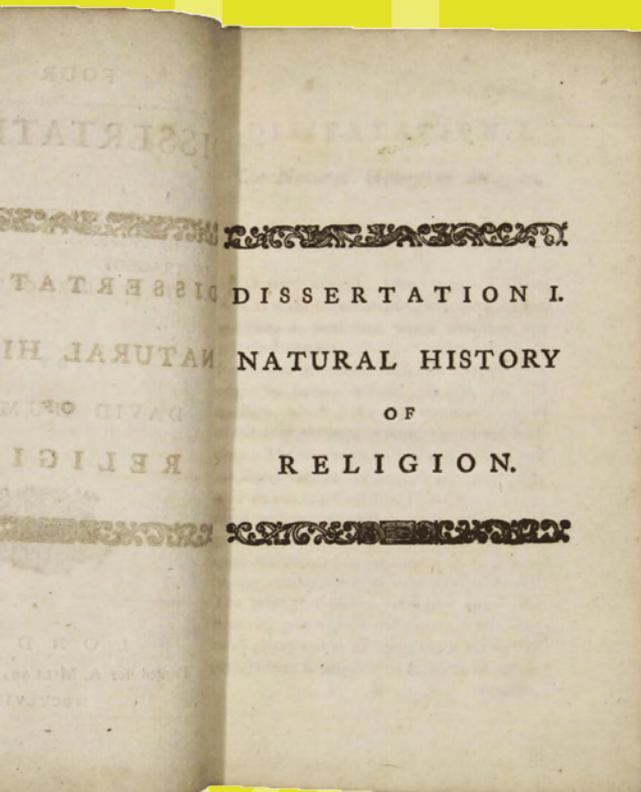
「推論から発して有神論が人類の原初宗教であったが、その後墮落して異教徒世界における多神教やその他一切のいろんな迷信が生み出されたなどということは明らかに不可能としか考えられない」。

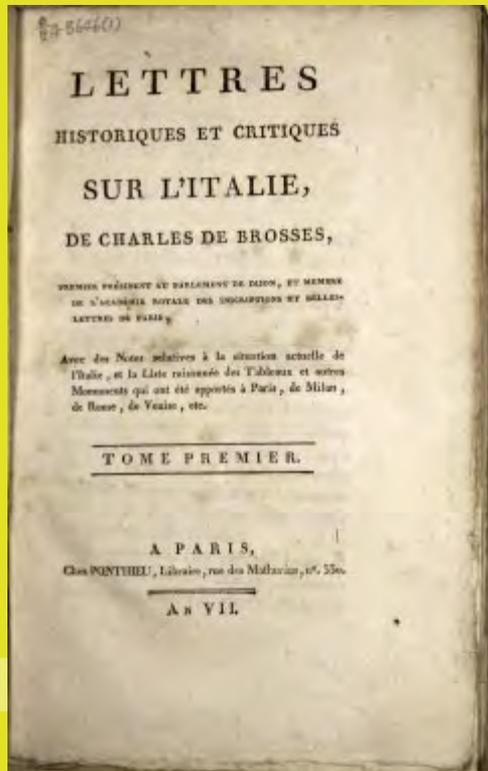
... Which ever side of this dilemma we take, it must appear impossible, that theism could, from reasoning, have been the primary religion of human race, and have afterwards, by its corruption, given birth to idolatry and to all the various superstitions of the heathen world. ...

*Four dissertations, ...*  
op.cit., p. 9から引用

ヒュームによれば、原始に知的な宗教原理をもった人々が文明化されるや真理を破棄して誤謬を採用するなど本末転倒であり、もはや異教の出現を真の宗教（一神教）からの墮落に求めることはできない。むしろ一神教こそ異教から進歩したのであり、一神教を含めた宗教一般の起源が無知の産物＝多神教にあるのだ。なるほど宇宙の秩序の見事なデザイン（結果）から至高の存在者たるデザイナー（原因）を導きだす理神論者の論証もよくできている。だが原因と結果の間に必然的な因果律は存在せず、奇蹟が神の証とされるなら逆にこのデザイナー自身が創造した自然秩序を裏切ることになるだろう――。ヒュームはホップズ以降の自然観の転換を前提に理神論の普遍主義に「歴史」を導入することで、「自然宗教」をいわゆる“未開宗教”の意味へと転換させた。これが彼にとっての宗教の“自然史”であった。

『宗教の自然史』扉ページ





ド・ブロス『イタリア便り』*Lettres historiques et critiques sur l'Italie, de Charles de Brosses ... : avec des notes relatives à la situation actuelle de l'Italie, et la liste raisonnée des tableaux et autres monuments qui ont été apportés à Paris, de Milan, de Rome, de Venise, etc.* A Paris, Chez Ponthieu ..., An VII【貴A B646(1)】

1739年5月から約9か月のイタリア滞在を題材に、現地からフランスの友人に出された手紙の体裁で綴られたエッセイ集の初版。生前から草稿は友人らの間で閲覧されていたが、ド・ブロスの死後、亡命貴族の蔵書から偶然発見されたものを、革命派の編者セリイが遺族に無断で出版した。

ヒュームが唯一神崇拜を古代人に否定したとすれば、『フェティシユ諸神の崇拜』（1760）の著者シャルル・ド・ブロスは野生人に拒否した。彼はカトリックから理神論まで一致していたプラトン主義的象徴解釈に批判の照準を合わせ、アフリカ黒人の崇拜に「象徴なき崇拜対象」の証拠を発見したと主張した<sup>10)</sup>。それが彼の手になる造語“フェティシズム”である。偶像崇拜が木や石に人間が彫琢する像（イメージ）に対する崇拜であるのに対し、フェティシズムは人格はおろかなんの像も象徴もない木や石自体を拝むさらに低級な物質崇拜である。これを宗教の起源として多神教を介して一神教への進歩を論じたこのド・ブロスやヒュームらの宗教進歩論の登場により、キリスト教神学と理神論に共通した、宗教に関する真偽の区別の最終基準であった一神教の真理性は完全にその論拠を失うことになったのである。

10) M. David (1977), 杉本(2005)(2010)

18世紀の進歩の観念は19世紀の進歩主義歴史哲学に先鞭をつける役割を果たした。だがそれだけでなく、啓蒙の時代の宗教進歩論は“誤った宗教／真の宗教”の二元論を破棄し、次の時代の人間学や社会科学が対象とする単一の「宗教」概念をも準備した。それは“動物／人間”の二元論を破棄し、サルから人類への進化を唱えた『種の起源』（1859）に遡ることちょうど一世紀前に現れた、いわば啓蒙の進化論でもあったとは言い過ぎだろうか。

Hume

Voltaire Fontenelle

## ■参考文献

- C. Becker, *The heavenly city of the eighteenth-century philosophers*, Yale University Press, 1932 = 『一八世紀哲学者の楽園』小林章夫訳、上智大学出版、2006年
- C. Bernand et S. Gruzinski, *De l'idolâtrie*, Seuil, 1988
- J. H. Brumfitt, Introduction : *La philosophie de l'histoire* », in *Les œuvres complètes de Voltaire*, t.59, Oxford, 1969
- E. Cassirer, *The Platonic Renaissance in England*, Nelson, 1953 = 『英国のプラトン・ルネサンス—ケンブリッジ学派の思想潮流』三井礼子訳、工作舎、1993年
- M. David, « Les idées du 18e siècle sur l'idolâtrie, et les audaces de David Hume et du président de Brosses », in *Numen*, Aug. 1977
- J. Fieser (ed.), *Early responses to Hume's writings on Religion*, 2nd ed, Thoemmes, 2005
- J. C. A. Gaskin, *Hume's philosophy of religion*, 2nd ed, Macmillan, 1988
- P. Gay, *The Enlightenment : The Rise of Modern Paganisme*, Weidenfeld and Nicolson, 1966
- P. Hazard, *La crise de la conscience Européenne (1680-1715)*, Boivin et Cie, 1935 = 『ヨーロッパ精神の危機 1680-1715』野沢協訳、法政大学出版局、1973年
- F. E. Manuel, *The Eighteenth Century Confronts the Gods*, Harvard University, 1959
- E. Mossner, « Hume's Four Dissertations : An Essay in Biography and Bibliography », in *Modern Philology*, University of Chicago, v. 48, 1950-51
- R. Pettazzoni, « La formation du monothéisme », in *Revue de l'Université de Bruxelles*, 1950
- D. Z. Phillips, « Is Hume's "True Religion" a Religious Belief », in *Religion and Hume's Legacy*, D. Z. Phillips and T. Tessin (ed.), Macmillan, 1999
- H. Pinard de la Boullaye, *L'étude comparée des religions*, 3<sup>e</sup> éd., 1929, t. 1
- R. Pomeau, *La Religion de Voltaire*, Nizet, 1969
- F. Schmidt, « Les polythéismes: dégénérescence ou progrès ? » in *L'Impensable polythéisme*, Édition des archives contemporaines, 1988
- B. Willey, *The seventeenth century background*, Doubleday, 1953 = 『十七世紀の思想的風土』深瀬基寛訳、創文社、1958年
- 赤木昭三『フランス近代の反宗教思想—リベルタンと地下写本』岩波書店、1993年
- 板橋重夫『「人間の科学」と宗教—デイヴィッド・ヒューム研究』東京法令出版、1995年
- 野沢協「解説」、ピエール・ベール著作集『続・彗星雑考』法政大学出版局、1989年
- 杉本隆司「啓蒙思想としてのフェティシズム概念—ド・ブロス、ヒューム、ヴォルテール」『一橋論叢』第134巻、第2号、2005年
- 「ド・ブロスの宗教起源論と言語起源の問題」『宗教研究』第84巻364号、6月号、2010年
- 山田園子「異教徒の救い—自然の光とキリストへの信仰」『廣島法學』第16巻、第3号、1993年

**CHSSL EXPOSITION**

**SERIES NUMBER 04**

**ヒューム『宗教の自然史』の  
思想圏**

**文章●杉本 隆司（一橋  
大学社会学研究科特別研  
究員）**

**2012年5月9日公開開始**

**掲載されている画像は特記  
ある場合を除き一橋大学社  
会科学古典資料センター所  
蔵資料のものであります。本文の  
著作権は一橋大学社会学  
科学古典資料センターに帰属  
します。著作権法上で認めら  
れている場合を除き、掲載さ  
れている文章および画像の  
一部または全部の無断転  
載・改変を禁じます。**